

ジャングル・ブック

—— オオカミ少年モウグリの物語 ——

〔第二部〕



キップリング作／金原瑞人訳

訳者 金原瑞人（かねはら みずひと）

1954 年岡山県に生まれる。法政大学文学部英文科博士課程に学ぶ。現在、同大学社会学部専任講師として教鞭をとるかたわら、英文学、ことに新しい英米児童文学の翻訳につとめる。おもな訳書に『幻の馬物語』四部作、『かかし』『のっぽのサラ』『ブラックスワン』（以上福武書店）など多数がある。

画家 中村悦子（なかむら えつこ）

1959 年群馬県に生まれる。翻訳文学のさし絵を中心に『のっぽのサラ』『ピロードの部屋の秘密』（以上福武書店）『おねいちゃん』（理論社）『こりすのベリー物語』（金の星社）などがある。

偕成社文庫 3174

小学上級から

ジャングル・ブック [第二部]

1990 年 7 月 初版第 1 刷

NDC 933 240 p 19 cm

作 者 ラドヤード=キップリング

訳 者 金 原 瑞 人

発行者 今 村 廣

印刷所 新興印刷製本株式会社

発 行 所 株式会社 偕 成 社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町 3-5

振替・東京 5-1352 番 〒 162

© Mizuhito KANEHARA, Etsuko NAKAMURA 1990 年 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。 ISBN 4-03-651740-6

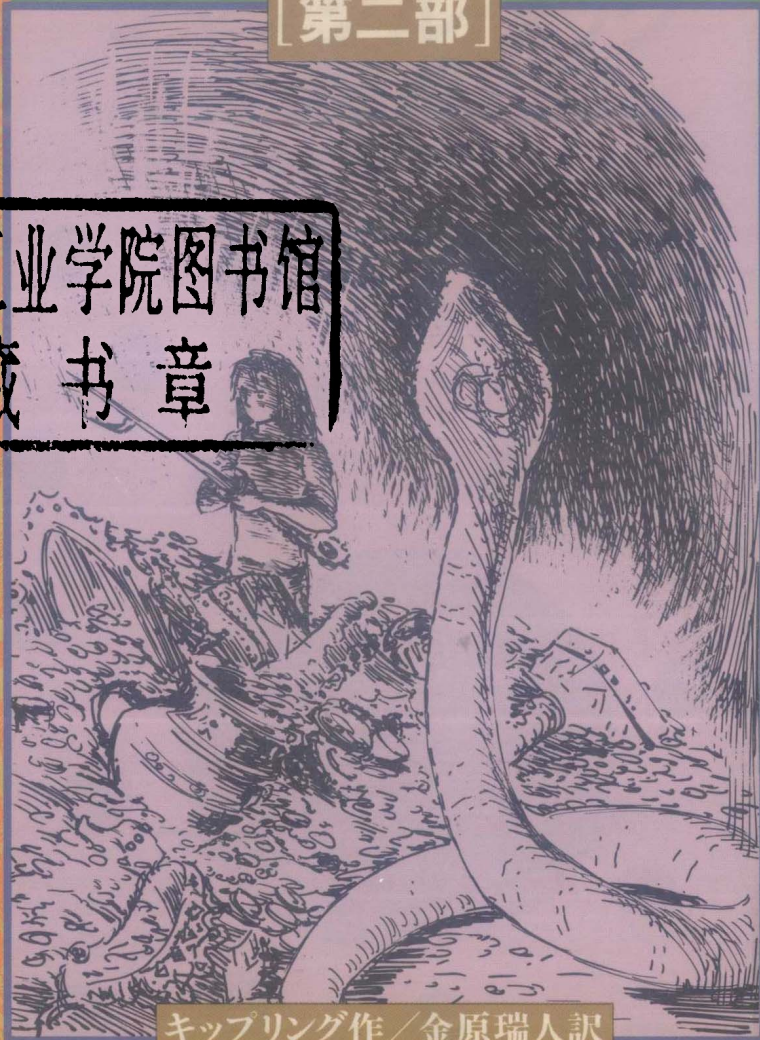
偕成社は、平日も休日も 24 時間、電話でも FAX でも本のご注文をお受けしています。
どうぞご利用ください。電話 03-260-3221 (代) FAX 03-267-0124

ジャングル・ブック

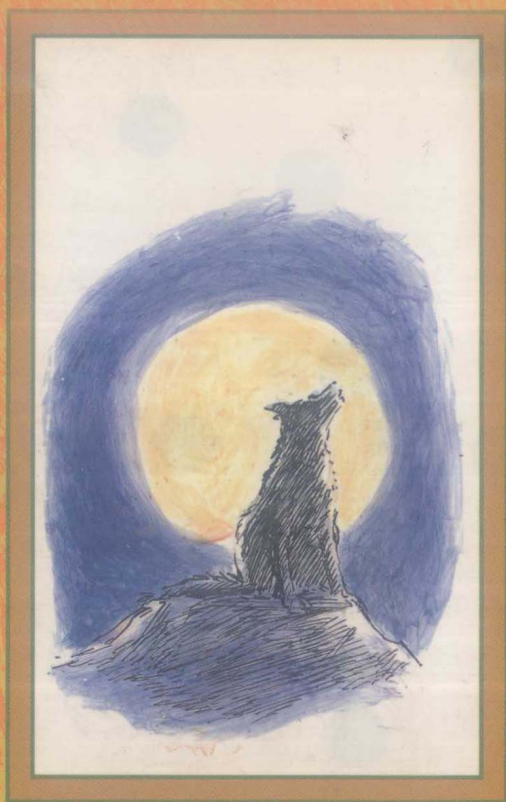
——オオカミ少年モウグリの物語——

[第二部]

工業学院图书馆
藏书章



キップリング作／金原瑞人訳



ジャングル・ブック II

キップリング作 金原瑞人訳

THE JUNGLE BOOK

by

Rudyard Kipling

1933

もくじ

第六章	死 し の棒 ぼう		7
第七章	赤 あか 犬 いぬ		53
第八章	春 はる をかける		111
番外編	ラク（ジャングル）にて		165
解説		金原瑞人 かねはらみずひと	234

さし絵・中村悦子

第六章
死しの

棒ぼう



露^{つゆ}が大地^{だいち}におりていらい、

けっして足^たることを知らぬもの四つ……

ジャカーラの口、

トンビの腹^{はら}、

サルの手、

人の目。

ジャングルのことわざ

大ニシキヘビのカーは、脱皮^{だっぴ}をしたところだった。おそらく、生まれてから二百回めくらしいの脱皮^{だっぴ}だろう。「冷たいすみか」で、ひと晩^{ばん}カーのせわになって命^{いのち}をすくってもらったモウグリは、その恩^{おん}をわすれず、あいさつにやってきた。ヘビは脱皮^{だっぴ}のあと、新しい皮^{かわ}が美しく輝^{かがや}きたすまではふつう、ふきげんにむつつりしているものだ。

カーは以前のようにモウグリをからかうことはなかった。ジャングルのほかの獣たちと同じように、ちゃんとジャングルの頭としててもなすようになっていた。そしてカーのような大きなニシキヘビがいつも耳にする知らせを、モウグリにひとつのこらず教えてくれた。カーの知らないことといえばせいぜい、地面のすぐ近くや土のなか、岩の下や巣穴のおく、あるいは木のうろにすんでいる連中のことくらいだが、そんなことはカーのからだのいちばん小さいウロコ一枚に書きこんでしまえる。

その日の午後、モウグリはカーの大きなとぐろのなかにすわって、はがれ落ちたぼろぼろの古い皮を指でつついていた。それはカーがぬぎすてたままに、ねじれて岩のあいだで輪になっている。カーは礼儀正しく、モウグリのたくましいはだかの背中からだをまわしてやった。モウグリはちょうど生きた安楽いすにすわったような気分になった。

「目のうろこまで、そのままのこってるよ。」モウグリが古い皮をもてあそびながら、息をひそめていった。「もち主の足のそばで、その頭の皮をみてるなんて、おかしい気持ちだなあ！」

「まあな。だが、わたしには足はないぞ。」カーがいった。「それに、これはわしら一族のならわしだからな、わたしは奇妙な感じはせんがな。おまえの皮は古くなったりかたくなった

りすることはないのか？」

「そんなときには、水あびにいくんだよ。でも暑くてたまらないときには、皮をぬいでか
けまわりたいな。いたくなければね。」

「わしは水あびもするが、皮もぬぐ。この新しいやつはどうだ？」

モウグリはカーの大きな背中せなかの、ななめじまの皮をなでた。

「カメの背中はもっとかたいけど、こんなにきれいじゃないね。」モウグリはわけしり顔で
いった。「ぼくの名前はカエルという意味だけど、カエルの背中せなかはきれいなだけで、こんなに
かたくない。みてるとうっとりしてきちゃう……まるでユリの花のまだら模様もようみたいだ。」

「水をあびないといかんな。新しい皮かわは水でぬらしてやるまでは、深みふかがでない。さあ、
水あびにいこう。」

「ぼくが運はこんでいってあげるよ。」

モウグリはわらいながらかみこみ、カーの大きなからだのまんなかをもちあげた。そ
こは、たるほどの太さがあった。直径六十センチほどの水道管すいどうかんをもちあげるようなものだ。
カーはじつとして、気持ちよさそうにしている。こうして、いつもの夕方ゆうがたのあそびがはじ
まった。

全身が力のかたまりのような少年と、あらたに豪華な皮にきがえたニシキヘビとの、とつ
くみあいのはじまりだ。これは目と力の勝負だった。もちろん、カーがそのままの力で戦
えば、モウグリが十人いても一発でべしやんこになったところだろう。だが、カーもその
へんはこころえたもので、力の十分の一もだしていなかった。モウグリが少しうあら
あつかいをうけてもたえられるくらいになると、カーはこのあそびを教えてやった。こ
あそびほど、モウグリのからだをやわらかくしてくれるものはなかった。

ときどきカーが、くねくね動くからだをモウグリののどの下までまきつけることがあつ
た。モウグリは必死になつて片手をふりほどき、カーののどをしめつけようとした。する
とカーは、からだの力をぬいてやる。モウグリはすばやくとんで、カーがしつぽを岩か切
り株にまきつけて体勢をととのえようとするのをじやます。それからモウグリとカーは
くみあつたままごろごろころがり、頭と頭をつきあわせて相手のすきをうかがう。やがて、
美しい彫像のようにからみあつたふたつのからだは黄と黒のうずのなかにとけていき、ま
たモウグリが立ちあがろうと、手足をばたつかせるのだった。

「さあ、どうだ！」カーが頭でついてくるふりをする。モウグリのすばやい手でもはらい
のけられないくらいに速さだ。「それ！　ここをつくぞ、モウグリ！　ここだ、ここだ！　ど

うした、もう手が動かないのか？　それ、ここだ！」

このあそびのおわりはいつも、まっすぐについてくるカーの頭の一撃だった。その一発で、モウグリはひっくりかえってしまふ。このいなずまのような突きだけは、どうやってもかわすことができなかった。そしてカーのいうとおり、どうかわそうとしても、かわしようがないのだった。

「よき獲物を！」

カーが最後に声をかけた。モウグリはいつものように五メートルほどつきとばされて、息をつきながらわらった。それから草をつかんでおきあがると、カーのうしろについて、かしこいニシキヘビのお氣にいりの水あび場に行った。

それはぐるりを岩にかこまれた深く黒い沼で、木の株のしずんでいる、おもしろいところだった。モウグリはジャングルの獣のやりかたで、音をたてないようにすべりこんで、もぐっていった。それからまた音をたてないように顔をだし、頭の下に腕をおいてあおむけにうかんだ。そして岩の上に月がのぼるのを見物した。モウグリが足で水をはねると、水にうつった月がこわれた。カーのダイヤモンドのような形の頭がカミソリのように水面をぎり、モウグリの肩の上でひとやすみした。カーとモウグリはゆったりと冷たい水につ

かったまま、じっとしていた。

「なんていい気持ちなんだろう。」モウグリがようやく口をひらいて、けだるい声でいった。「そういえば、いまごろ人間の群れは、土でできたわなのなかのかたい木の上に横になつて、わざわざきれいな空気をしめだして、きたない布を大きな頭の上にかけて、鼻で、きみの悪い歌をうたつてるところだろうな。ジャングルのほうがずっといいや。」

一匹のコブラが、あわただしく岩の上からすべりこんできて、水を飲むと、「よき獲物を！」と声をかけていつてしまった。

カーが空気のもれるような音をたてた。ふいになにか思いだしたようだった。

「モウグリよ、ジャングルでは、ほしいものはなんでも手にはいると思うか？」

「ぜんぶってわけじゃないよ。」モウグリがわらいながらいった。「のぞみといえば、月に一度はシアールカーンみたいに強いやつをしとめてみたいな。いまなら、水牛の助けなにかかりずに、この手で殺してやれるよ。それから雨がつつくときには太陽をおがみたいし、真夏には雨が太陽をおおってほしい。おながへったことはなかったけど、まえばヤギをしとめてみたいって思ったよ、でもヤギをしとめもしないうちに、雄ジカをしとめなくな

て、そのつぎにはインドジカをしとめたくなった。でも、みんなこんなふうに考えてるんじゃないかなあ。」

「ほかにほしいものはないのか？」

大きなニシキヘビがたずねた。

「ほかになにがいるっていうの？　ぼくにはこのジャングルがあるし、ジャングルはぼくを気にいってくれている。太陽たいようがのぼるところから太陽のしずむところまで、どこをさがしてもこれ以上いじょうのものはないじゃない。」

「ふむ、あのコブラがいったんだが……」

カーが話しはじめた。

「あのコブラって？　さっきここにきたやつは、なにもいわなかったよ。獲物えものでも追いかけていたのかな。」

「いや、あれとはべつのコブラだ。」

「毒どくの一族いちぞくとつきあってるの？　ぼくは、なるべく顔をあわさないようにしてるんだ。前まえ歯ばに毒をもってるんだもん。あれはひどいよ。あんなに小さいくせにさ。でも、そのコブラってのは、どんな頭巾ずきんをもってるやつかな？」

カーは横波をうけた蒸気船のように、水のなかでゆっくりとからだをゆらした。

「月が三度か、四度満ちてかけるまえのことだ。わしは『冷たいすみか』で狩りをしてた。あの場所のことは、おまえもわすれておらんだろう。あそこでな、わしの獲物がなきり声をあげて水ためのまえを走って、あの家に逃げこんだ。ほれ、おまえのためにわしが壁をつきくずしてやったあの家じゃよ。そして獲物は地面の下にかけこんだ。」

「でも『冷たいすみか』の連中は、穴のなかにすんだりしないもんだよ。」

モウグリには、カーがサルのことを話しているのがわかつていた。

「すもうと思ってはいったのではない。生きのびようと逃げこんだのだ。」カーが舌のさきをふるわせながらいった。「そいつは穴のなかをどこまでも逃げていった。わしは追いかけて、それをしとめ、それからねむった。そのうち目がさめると、わしはその穴をおくのほうまでいってみることにした。」

「地面の下に穴を？」

「そうとも。そしてついに白頭巾、つまり白コブラにお目にかかったというわけだ。そいつはわしの知らんことまで話してくれ、みたこともないようなものまでみせてくれた。」

「新しい獲物のこと？　おいしかった？」